不器用な細工師

柏原　福子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不器用な細工師

【Ｎコード】
Ｎ０９６１Ｚ

【作者名】
柏原　福子

【あらすじ】
１１歳の時から後宮生活に終わりを告げる。侯爵家の次女リアラーナは皇帝に愛されることなく９年という時を過ごす。疲れ切ってしまった彼女は幸いにして『細工師』でもあった。『細工師』とは、武器、防具、装飾品に生活用品、あらゆるものに魔法を発動させることができる細工を施すことができ、魔法使いと同じく需要ある職業だった。多くは帝都に個人の店を構えるか、ギルドに入るか、（少し違う事もあるが）どちらにしても食いっぱぐれることはない職業である。

―――後宮にはいたくないし、食っていける仕事もある。こうなりゃ、脱走するしかないわよね。・・・そんなこんなで細工師となったわたしだけど、なぜか滅多に勤めることがないはずの神殿に勤めている。ここ、後宮からも、城からも近いんですけど・・・ｏｒｚそんなリアラーナの笑い（予定）もシリアス（は、）も戦い（未定）もラブ（！！）もありなそんな話。※優柔不断な作者の処女作です。

脱走します

運命だと思った。

わたしとあの人の間に阻むものなんて何もなくて、すぐにでもあの人の婚約者になって、幸せな結婚をしてあの人の隣で微笑んでいるはず。

これが十二の時。

でもそれは、ぜんぜん確かな未来じゃなかった。だって現に、わたしは未だに後宮にいる一人のお妃候補。正式な婚約者じゃない。

もう何度、「なぜ」ということを考えていたんだろう。自分が悪いような気がして、派手な生活なんて楽しめるわけがなかった。

これが十五の時。

もう、考えるのも嫌で、周りの人全員の視線が嫌で、新しく入ってくる人が嫌で、でも意地を張ることも出来ないわたしはまた一段と地味になった。

これが十七の時。

そして今、婚期なんてもうとっくに過ぎていて、つらい現実を少しは受け止められるようになった。もう九年間同じ窓から同じ景色を見ている。

そこに広がるのは、美しく燃えるように鮮やかな夏の花も枯れ、深い色を帯びた秋の花も枯れ、花は確かに有るけど物足りない冬の景色―

そんな寒そうな景色に反して、わたしのいるこの場所は暖かくて後宮の中でも最上級にあたる豪奢な部屋。

豪奢ではあるけれど後宮に入る前に見たことのある細工師の部屋に似ている、貴族の娘が使うとは思えない部屋。

今、二十となったわたしは、この部屋を出ようと思う―――

準備です

後宮に入る前から持っていたものの中で売って路銀になりそうな宝石や装飾品を取り出して鞄にしまう。

それに食べていくための道具も。この日のために手に入れた平民が着るような質素なブラウスとズボンをすぐに取り出せるようにと一番最後に鞄に入れて用意が終わる。

そして、髪を切る。いつも顔を隠すように伸ばされた前髪と小さい頃から細やかな手入れがされ、緩やかな曲線を持つ腰まである髪を肩まで。

後宮でのわたしの目印なんて、この長く伸びたこげ茶色の髪と後宮にしては地味な装い。これがなくなれば、多くの人はわたしが誰かなんて直ぐには分からない。

最後に目深にフードをかぶって完了。

部屋を抜け出し、堂々と裏門に向かう。

見つからない自信があるわけではない。

だが例え、わたしが誰か分かろうと、このリアラーナ・アガト・フランチェスを咎めるなんて、よほどの人で無ければしない。

まず、わたしは王弟の公爵家の三姉妹の次女であって後宮の中での

地位も確固たるものであるから。

次に、わたしは不気味だから。わたしは部屋に籠もる事が多い。それは、わたしの趣味（もう、趣味の域から超えているけど）が細工だから。

後宮に入る前、わたしは家を抜け出したときに知りあったおばあさんにときどき会いに行っていた。

そのおばあさんが細工師だって知った時、おばあさんに頼み込んで弟子にしてもらった。

それから二年後、後宮に入ることになったときは、「せっかく見込みがあったのに教えられなくなっちまったじゃなか！！」と怒られてしまった。

その時は嬉しくて、寂しくて泣いてしまった。

そして、数冊のノートを渡され後宮に行っても勉強できるようにしてくれた。

それを読むとき、師匠様の事を思い出して後宮での寂しい思いも和らいだ。

それに、後宮に入って私の細工の技術は見る見る上がっていった。

誰も訪れないような後宮の生活は何かを必死にやっていないと辛過ぎたっていう皮肉な理由があるけど。

でも、結局細工をしているとき、師匠様のことを思い出せて本当に

嬉しかった。

　そんな訳で、何が行われてるか知らないのに、ほかの人は閉じられた扉の隙間から刃物を研いだり、宝石を磨り潰すような音が聞こえるのは不気味だと感じるのだろう。

後宮の妃候補の部屋からなら尚更だ。

魔女的な何かを行っているのでは・・・と。

そんな噂に拍車をかけるように、わたしの顔半分は髪で隠れていた。

王が一度としてわたしのもとに来なかったという事と少しずつ入ってくるわたしよりずっと綺麗な人たち。わたしがお飾りであることは直ぐに分かる。

まぁ、いくら閉鎖的な後宮だからといって、身分の高いわたしを表立って苛めてくる人もいなかったから、恵まれてはいるんだと思う。

だからといって、自分に自信の無いわたしが堂々と出来る訳が無くて、年を重ねるごとに前髪は長くなった。

そうして、わたしの前髪は不気味さに拍車をかけることになった。

けど、この前髪は結構役に立つ。

気持ちがふさいでいる時、外と隔ててくれている様で落ち着ける。

まぁ、もう切っちゃったけど。さすがにあれでは、見つかってしま

うから。

そんな訳で怪しく、なおかつ、貴族としての身分なら後宮のどの姫よりも高いわたしには触れないのが一番と定着した。

わたしの侍女達でさえ、わたしを飾ることを諦め、距離を取っていた。

脱出完了です

裏門に着くまでに何人かの人に見られたけれど、やはり声をかける人はいない。

そして裏門にたどり着くと、ここの空気をすべて吐き出すように息を吐いた。

門番たちが怪訝そうにしていたけれどさして問題なく通過できた。

侍女の身分証明書を盗んできた甲斐がある。

城に続いているとは思えないほど暗く細い道にでる。少し進んで服を平民のものに着替える。

もうあの場所には戻らない。やっと抜け出すことができたのだから・・・・・・

・・・・・・けど、おかしい。

あの息苦しい後宮から出たら、達成感で興奮してしまうだろうとずっと思っていた・・・・・・・

なのに・・・

出てきたのは、涙・・・？

「うっ、・・・うぅ。・・・あは、無理よねぇ・・・」

掠れた嗚咽が次第に大きくなる。

それでも足は止めない。

涙が、ゆがんだ口の横を通り過ぎる。

頬に触れる涙は温かく、嗚咽は、もうどうにも抑え切れなくて獣のような唸りが喉の奥から出てきた。

・・・・・・ずっと、ずっと。朝起きても、庭を散歩していても、細工をしていたとしても、あの人を一目遠くからでも見れて、嬉しいはずの時でも。

胸の辺りには四方八方から押さえ込まれるような苦しさがあった。それに慣れたと思っていた。もう無くなったのでは、と思っていた。

・・・・・・けど、無くなっていたなら今、ここにあったのは高揚感なんだろう。

あいかわらず続く苦しさは、あの人とは結ばれるどころか、一度として会いにきてはくれなかった、その事への失望感、惨めさやそれでも声をかけて貰いたくて待っても結局来てくれる事はなかった日々を思い出すと感じる、引き千切られるような切なさを思い出させる。

それでも、好きなんだ。そのはずなんだと思い続けてしまって。

最初は、細工に没頭するために部屋に籠もっていたつもりじゃなかった。

もし、あの人が会いに来たとき、直ぐにでも会いたかったから。

でもみんな勘違いしてたし、わたしもそのほうが良いんだって思って言い聞かせて。諦めたんだ、もういいんだって思ったつもりになって。

わたしはまだまだ現実を受け入れていなかったのだと、今になって気がついた。

もう、ボロボロなわたしの胸に容赦なく加速する圧迫感と刺さってくる刃。

視界が霞むのは、涙のせいだけではなかった。ずっとずっと続いていた心労に、更に加わる痛み。

体は限界だった。子供のように大声で泣き叫んだ後、ぷっつりとリアラーナの意識は途切れた。

失神中です

あの日、わたしが後宮に上がるようにいわれた十一才の夏。
まだ、社交界デビューしていなかったわたしが呼ばれた。
それは皇帝の花嫁候補に、年頃の娘がいるにもかかわらず公爵家の娘が呼ばれないとあっては、アルフォート公爵、リアラーナの父の不興を買うのは目に見えていた。
決して、父は愚かではない。権力のために娘のうち誰か一人でも皇帝の花嫁に、と必死に望む必要もない。
だが、周りや花嫁候補が選ばれた家によって、疑問と面倒なうわさが流れることは当然あるだろう。
それは、怠惰で、ある意味変化の無い貴族社会に合った、人の興味を引く為にゴテゴテと飾り付けられた性質の悪い噂になることもあるんだろう。
そうなっては、公爵家に良い事は無い。

必要なのは、花嫁候補として呼ばれたという事実。
これさえあれば、ある程度は何とかなる。だから公爵家に花嫁候補を、わたしを呼ぶ知らせが来た。

公爵家には、息子が居らず、長女が爵位を継ぐことになっていた。
今から数百年前に、このネシラル大陸全土にわたる魔物を率いる魔族との大戦があったため、跡取りとなるはずであった男性も戦で次々と死んでいった。
（のちに最も激しい戦いの地となり、誰も足を踏み入れることの出来ない消滅の地となった王国の名をとりシアスエ戦と呼ばれた。）

そのため、女性が爵位を継ぐことも珍しくはなくなった。
また、大戦中や戦後は領地を運営することが難しくなったこともあり、兄であろうが弟であろうが、姉、妹であろうが実力を持つ者が必要とされたことも、女性が爵位を継ぐのを容易にさせた。

リアラーナの記憶の中の姉アルカナは、まさに才色兼備という言葉に相応しかった。
その時十五才であったアルカナは、まだ少女の域を超えない人々が多い中、非常に目立った。なぜなら、すっと通った鼻筋に、大きな瞳に豊かなまつげ、唇はふっくらと花びらのよう、父と同じこげ茶色の豊かな巻き毛に青い瞳を持つ愛らしい容姿の美人だった。
だが、纏うのは扇情的な雰囲気でも、かわらしい雰囲気でもなく、きたる未来、公爵家を継ぐ者として相応しい威厳のある雰囲気であったからである。
それは、幼いころから愛されるための教育ではなく、常に上に立ち人々を導くための教育をされたことがありありと表されていた。

そして、リアラーナの三年後に生まれた当時八才だった妹リリアッテは将来美人になることが約束された天使のような子であった。
一人だけ母シフランのように柔らかな黄金色の髪をもち、父の青い瞳を受け継いでいた。
末っ子として父、母、アルカナとリアラーナ、そして城内の使用人全員に愛されて育った。それは、確かに天使のような可愛らしさのおかげもあるのだろうが、何よりその天真爛漫な性格に理由があったのであろう。

それに対して、リアラーナの容姿、性格は二人に比べると派手さは無かった。リアラーナの容姿は、父に似たこげ茶色の細い髪、母と同じ赤い瞳。良く言えば優しそうな、悪く言えば地味な容姿だった。

リアラーナは比較的マイペースに育ったほうであると言える。五つも違うアルカナはリアラーナと喧嘩をするわけでなく、父や母はリリアッテをかわいがった。リアラーナを疎かにする訳ではなかったが、やはり自然と関心は優秀なアルカナとかわいいリリアッテに向かった。

だから、リアラーナは侍女を連れて好き勝手に庭や城のあちこち、時には城外を探検してまわった。そのときに、細工師カミラと出会い、細工の技術を学んだのであった。

――――――

この世界では、緋、藍、金、碧、白、黒の属性がある。人は必ず一つの属性は持っている。だが稀に、複数の属性を持ち合わせている人もいる。その中で、金を持っている人が細工師となれる。金とは、土や大地に由来したものだ。例えば、スカーレットと呼ばれる緋を代表する鉱石も、金が含まれている。だから、細工をするためには、金を持っていないと細工師にはなれない。逆に、金を持っていればどの属性の石を使っても細工することはできる。

また、数百年前のシアスエ戦で、多くの細工技術も失われた。それでも日常生活に役に立つものはある程度残っていた。人々は少しでも多く細工の技術を伝えるために、それまで一子相伝だった細工の技術を学園で公開し、資格さえある者には誰でも学ばせる機会を与えた。そのため日用品に使われるような細工品は庶民でも手に入れることができた。もちろん、より高性能、高機能なものは高価になり貴族や一部の人にしか手に入れられなかった。

リアラーナは、金と緋、白、黒を持ち合わせる非常に珍しい子であった。また、手先は器用であり、魔力も高い（これは本人は自覚していないが）。また、リアラーナは師にも恵まれた子であった。カミラは独自の細工技術も開発していた非常に優れた細工師であった。今は、年のせいか余り高度な細工は出来ないが、それでもやは

り優秀な細工師であることに変わりなかった。
リアラーナはまさに細工師となる運命にあるようであった。

――――――

そんな姉妹であったら、爵位を継ぐべきアルカナは後宮に上がれない。リリアッテは幼すぎるために後宮に一人で入れるわけには行かない。だが公爵家を放って置くこともできるはずも無く、消去法として目立つことのなかったリアラーナが選ばれた。

失神中です（後書き）

読んで下さった皆様ありがとうございます！
お気に入りに入れて下さった方がいて、浮かれてしまいました（汗
楽しんでもらえたら、とても嬉しいです。

まだ失神中です

そのときのリアラーナは、後宮という華やかな場所にいくことが子供の好奇心を刺激し行ってみたいという気持ちと、家族とはほとんど会えなくなるという環境に恐怖を抱いていた。

リアラーナのいるこの帝国アガトの後宮はある歴史的事件を境に家族とでさえ、外から連絡を取ることは困難な場所であった。外部からの情報は遮断され、皇帝の花嫁となる時、後宮を出るその時まで無知でいるしかなかった。その代わり、ある程度の贅沢は許されていた。

そんな環境に不安を抱きながら、肝心な皇帝についてはさして興味は無かったと言えよう。まだ十一才と幼く、色恋よりも城の探検や密か会っていた細工師のカミラの授業のほうがよほど面白かったあの頃、結婚するかもしれない相手は好奇心の対象から外れていた。

そんなとき、公爵家で夜会が開かれた。

もしこの時、結婚することになるかもしれない皇帝に欠片たりとも興味を持たなければ、今の状況も変わっていたのかもしれない。

そしてわたしはありふれた話通り、姉と踊る皇帝に恋をした。

皇帝はそのとき十五才で肩より少し上まである濡れ羽色の髪を揺らし、少し硬い表情で踊っていた。けれど、その容姿は切れ長の目と薄い唇、すっと通った鼻筋、まだ少年のためか中性的な顔立ち、威圧感がありながらも一瞬で見惚れてしまうほど整っていた。

まだ社交界デビューをしていなかったわたしは、二階の手すりの陰に隠れその様子を窺っていた。広間の華やかな光に対してこちら側は陰になっていて、隠れて中の様子を窺うのにはうってつけの場所だった。

そう、そこは中からは容易には気付かれない場所。
普通なら向こうから気付くはずはない。
だけど、わたしと皇帝の、
くすんだ赤い目と漆黒の目が合わさった。
あの人の冷たい瞳に魅かれた――――
気になった。もし笑ったら、あの黒い瞳の中に違う色が見える気がした。
それが、わたしの緋（あか）だったら良いのに。
顔が自分でもわかるくらいに真っ赤になって、あの人がほしいって思った。

この時、後宮に行きたいのか分からなかった少女の気持ちはがらりと変わった。もともと色恋に疎かったリアラーナにとって初恋は衝撃であった。こんなタイミングで恋するなんて運命なんだ、そんな思い込みもあった。世間知らずで初恋、運命という言葉に浮かれた少女に後宮へ行くことを決意させるにはそれで充分だった。
しかし両親に構ってもらった記憶の乏しいリアラーナは、素直にその気持ちを言うことができず、結局新しいもの、面白いものが見たいのだと嘘を付いた。
この答えは両親を安心させた。まず、後宮に行きたいという答え。そして、皇帝のことなど眼中にないかのような動機。両親はリアラーナが皇帝から寵愛を受けることはないと知っていた。だがこの子

なら、後宮でも強く生きていけるのではないかと思った。きっと、皇帝の寵愛などほしがらず、逞しく生きていくだろうと思った。当時、侍女たちからリアラーナは城の探検で新しいもの、面白い場所、そんなことを見つけるのが何よりも好きだと報告を受けていた両親は安心した。

誰もリアラーナが皇帝に恋をしたなんて気がつかなかった。

目が覚めました

「ん・・・うっ・・・えっ、待って」

「えっ！あ、どこ」

「・・・・・・」

寝ぼけてしまった。

ここは、と思ってあたりを見回してみたけど、とりあえず昨日辿った道の脇であることに間違いはなさそう。丁度いい具合に茂みに隠れていたおかげで誰にも見つからなかったようだ。
それに、身体の節々は痛むけど、他にはあまり調子が悪そうなところは見当たら無いし、たぶん数時間眠っていただけなんだろう。さすがに何日も寝ていて誰も気付かないことはないだろうし。

少し寝たからだろうか。相変わらず、後宮での事を思うと胸が痛むけど、これから頑張ろうと前向きに思えた。

とりあえずは師匠様のところに向かおう、と思って一歩一歩を噛みしめるように歩いていたときだった。目の前の空、私の両側に立つ木々の間の空を黒い鳥が数羽横切った。
それを見ると、自然に笑みがこぼれて私の歩みは軽くなった。
あれと同じような黒い鳥だった。

わたしを後宮から出してくれたのは。
元から後宮で住むのには疲れたしまってはいた。
皇帝を好きで居続けることに疑問も覚えていた。
でも、踏み出せなかった。
「ふはっ」
思い出すと今でも笑えてしまう。

一ヶ月くらい前、私は運よく後宮の庭園の奥の一角に一人、皇帝がいるのを見つけれた。
あのときも、やっぱりあの人は綺麗で素敵だった。神々しいとも思った。
あれを見るまでは。
「あの人の声、聞いたこと無かったな」と思っていたときだった。
一羽の黒い鳥が飛んできた。
そして、あいつは皇帝にじゃれたのだった。
いや、じゃれたと言うのは可笑しいかもしれない。かなり速いスピードだった。しかも、真正面から突っ込んでいったのだった。
あの人は、尻もちをついたのだった。
それを見て、やっとわかったのだった。皇帝も人なんだ。
皇帝という肩書、ため息をついてしまうほどの整った顔立ち、漆黒の瞳。そんなことが私を盲目にしたのかもしれない。
もちろん、皇帝だし、普通の人間ではないんだと思う。でも、皇帝

も尻もちつくんだ。っていうことが新鮮だった。尻もちつく姿も可愛らしいと思えて、かっこ悪いとは思えなかったけど。
人は一人しかいない訳じゃない。皇帝の他にも人はいる。
皇帝は唯一の神様でも何でもないんだ。人なんだ。嬉しかった。
人なら諦められるから。

きっとこれからいくら待ったってあの人が私を愛してくれることはないんだろう。
婚期なんて過ぎてるし。
綺麗でもない。
私はいらないだろう。

なら、もう見ない方がいい。
愛してくれなくても、あの人と話す機会が来るかもしれない。そうなったら、きっと耐えれない。
あの人を今以上好きにならない自信がない。
さっきの尻もちでさえ、わたしのあの人への気持ちを強くさせたのに。
好きにならないわけがない。

・・・幸い、私は皇帝と一度もまともに話したことも無い。傷は浅い。幸いなんだろう。本当に。
もう望みがないなら、諦める。
私は、皇帝のことを思い続けて死ぬことは出来ない。
そんな健気な性格じゃない。

そう。私はそんな健気な性格じゃなかった・・・？
思い出せ・・・私は健気でも臆病じゃない。
小さい頃から自分の容姿が優れていないことなんて分かっていたじ

ゃない。
でも、全然悔しいなんて思っていなかった。
毎日が楽しかった。こんなに弱くなったのはあの人に恋をしたせい？
なら・・・。なら、いらない。こんな恋はいらない。辛い毎日しか
得れない恋なんていらない。

細工が世界を輝かせるのが好きだった。
そんな細工を作れる師匠様や私を誇りに思っていた。
私は自分を好きだったし、誇りに思っていた。

あの頃の楽しい世界に戻るのもいいのじゃない・・・
きっと私はまた輝けることが出来るには違いないわ！
リアラーナは元の世界へと踏み出すことを決めた。

忘れそうになっていた。
私は辛い日々から逃げたいだけじゃなかった。
楽しみたかったんだ。生きることを！

重く考えなくていい。
今生きることを楽しめばいい。
まだ二十歳じゃない。
人生を楽しむ事から始めたっっていいはずだわ。
辛いことばかりじゃ私は何もできないもの。

リアラーナの歩みは、歩み始めとは打って変わった軽快な歩みとな

っていった。
リアラーナの気分は、未来への希望と苦い気持ちを抱きながらも高揚していた。

目が覚めました（後書き）

まだ、書き方も実験中なので不安定な所もありますが勘弁して下さい＜＞
ですが、アドバイスや気になることがあれば教えて頂けると嬉しいです。
拙いものですが、とりあえず皆様の楽しみになるのが一番うれしいです。

再会です。そして・・・

もうそろそろだ。
そう気付いたのは、人の声というか、後宮では感じれなかった、ただたくさんの人の気配を感じたからだ。
近づくにつれて、歩調が早くなってしまう。
この門を通れば、もう街に出るんだ。
門番の私を見る目が怖い。私が誰かか知っているわけないのに、怯んでしまいそうになる。
あの事の私を思い出せたとしても、やっぱり辛いものはつらいってことかな？
でも、きっとこの胸が高鳴るのは恐怖だけじゃない。そうわかっているんだから、もう大丈夫だ。

門を通り抜ける。

五感を刺激する街の匂い、風景、音、それが懐かしくも新鮮に感じる。
ふと、涙が滲んでいることに気づく。
どうもいけない。
やはり、まだ気持ちが不安定な気がする。苦笑してしまう。
街に出ると師匠様に早く会いたくなってしまった。
なかば駆け足で師匠様の家への道をたどる。
右、左、微かに覚えている目印に沿って向かう。
右、右、左。
そして到着。
目の前にある家は、昔と変わらないこじんまりしていて、修理の

跡が目立つ小さなつぎはぎの家。
そっと深呼吸して、息を整え、ドアノブに手をかける。
キィィーー
「誰だ！」
「師匠様っ！」
・・・・・・
叫んだ後、師匠様は固まってしまった。
「ひどいですよ。愛弟子を忘れたんですか。あぁ、こんなに白髪も増えちゃって」
その様子が面白くてからかった瞬間、頭に衝撃が走った。
懐かしいこの痛み。そんなに年をとってもまだ殴るのか。
「この馬鹿もん！！これは、部屋の掃除をしていただけだっ！」
そう言って、師匠様はニヤッと笑った。
あ、なんか嫌な予感がする。
というか、老けたわけじゃなかったのか。
「ふん。まぁ、いい。話を聞こうか」
その後、要約した話を師匠様に話した。
要約した話をしただけなのに、

「ふむ。それでリアラーナ、お前はこっちに戻って新しくて楽しい生活を送りながら、まだ残る初恋に敗れた傷を癒そうってことか。」
師匠様は昔と変わらず、人の考えていることを的確にあてる。辛かったのが忘れられてないことはまだ言ってないのに。
「ふん、ふん。なるほどね。そういうことなら、この街で細工の仕事をするつもりなんだな。なら丁度いい。しばらくしたら働き場所は見つかるだろう。とりあえず、ここで働きな」
「えっ。どういう事ですか。私はこれからギルドに入ろうと思っていたんですが・・・」
駆け出しの細工師は普通、ギルドに入って仕事を受け、名が売れた頃に自分の店を構えるのが一般的だって言っていたのを覚えている。
「ふん。お前、私を誰だと思っているんだい。知る人ぞ知る、名細工師カミラだぞ。その弟子ってことは、まず私の仕事を手伝ってから、独立していけばいいんだよ。ギルドから仕事を始めるだなんてもったい。なんたって、学園には無い細工ができるんだからな」
「あ、有難うございます？あっ。そういえば、私後宮で新しい細工いくつか作ってみたんですよ。見てもらっていいですか」
「ほう。やはりお前は私の弟子だな。才能がある。そこらの細工師共の連中は、新しい細工の一つや二つろくに組めやしない。どれ・・・」
師匠様はあまり裕福な家の出じゃなかったから、最初から有利な

条件で働くとかいうことは嫌いだって言ってたし、誰か一人を特別扱いするのは嫌いだって言っていたのに。
師匠様なりに気を使ってくれているのかな。師匠様の不器用な優しさにまた涙腺が刺激される。

不安定な自分に困りながらもリアラーナはその夜、再びカミラに細工を見てもらえ、共に語ることができ、久々に余計なことを考えることなく、楽しい夜を過ごすことができた。

「あれ、師匠様どこか行かれるんですか？」

朝、リアラーナが目を覚ますとカミラは大きな荷物を用意していた。

「ああ、悪いね。急に依頼を受けないといけなくなったもんでね。数日間空けておくことになるが、まぁ、大丈夫だろう。客が来たらお前が用を聞いてくれ。お前ならある程度のことは出来るだろう。」

「はぁ。一応できますけど、私一人で大丈夫ですかね。お客さんの相手なんてできるでしょうか。少し不安です」

「そこんところなら、大丈夫だね。ここに来る客は質の良い細工を求めてるんだよ。それから、お前が本当に弟子っていうことが分かるようにこれを預けておくよ。大事にしな」

そういって、師匠様は小指からひとつ指輪を取って投げてよこした。それは師匠様しか作れない指輪で、クリムという。色々な特殊効果があるが、主な役目は、師匠様が許可しないと指輪は所有者の指を離れないというところにある。
このクリムは、銀色の胴体に薄い赤色の鉱石で作った黄金虫のよ

うな小さな虫がつけられている。その羽の下にいくつもの属性もちの鉱石が小さく砕かれた状態で入れているらしい。そして、その指輪の内側にはびっしりと魔法の文字であるシアスエの古代文字が書かれてある。
とても繊細で綺麗な指輪なので、前からずっとくわしく見てみたかったのだ。
　とりあえず、このクリムを着けていれば師匠様が認めたという事が分かる。
この指輪は師匠様に触ることすら許してもらえなかったものなのに・・・

「はい、分かりました。じゃあ、留守は任せておいてください」

「それから、この家を出るときはクリムに家の戸締りをフルでさせておきな。もうお前の声で反応するようにしておいたけど、クリムの機能全部を使えるようにはしてないから、あんまりクリムに頼るんじゃないよ」

「分かってますよ。師匠様ならそうすると思っていましたし、安心して行っていいですよ」

「解剖しようとするなよ」

「っ！あ、はい・・・」

くっ、また心を読まれた・・・

「最後に、自分の気持ちを大切にするんだよ」

「？はい」

「それじゃ、いってくるよ」

「はい、いってらっしゃい」

そのとき私は師匠様から渡されたクリムのことで頭がいっぱいで、いくつかの違和感について考えようとせず、師匠様を見送ってしまった。

そのことに、リアラーナが深く後悔することになったのは次の日のことだった。そのときまで、リアラーナはカミラから預かったクリムをとても幸せそうに使っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0961z/

不器用な細工師

2011年12月10日23時56分発行